

---

# Dr + ナース

A n k o

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dr+ナース

### 【Nコード】

N7752A

### 【作者名】

Anko

### 【あらすじ】

東京の病院で、医者として活躍していた神崎茉耶は、ある事件を起こし、東北地方にある、小さな病院に移動させられた。新しい仲間、超個性的だった。見掛けはまるつきりヤクザみたいな医者。仕事は出来るが化粧がケバい看護師。なかなかスタイルもよく、顔もイケてる、真面目で気弱そうな癖に陰では遊び回っている看護師。しかし、人に好かれ易い神崎は…

## act1両者出揃う。

2006年夏。

私は、都内の総合病院から、東北地方にある、小さな病院に移動となった。

初出勤の日。

丸顔で小太りの婦長が医師と看護師の前で、私の紹介を始めた。

「こういう時は、自分で名前をいったりするのではないか？婦長は、私に喋る隙を与えないかの様に早口だ。」

「それでは、先生に自己紹介の方をお願いします」

婦長が、何の前触れもなく、突然、話を振ってきた。

「えっと、神崎<sup>カンザキマヤ</sup>茉耶です。一応外科医です。宜しく願います。」

看護師は私より1周り程若い。医師は私より大分年上だ。

婦長がまた話を再開し始めた頃、廊下から、バタバタと騒がしい足音が聞こえた。

「婦長、これ遅刻か!？」

入ってきた男は、来るところを間違えたヤクザのようで、医師が着る白衣も恐ろしく似合っていない。

「御影先生、この空気で遅刻じゃないはずがないでしょう!？」

婦長は小さな目を大きくつり上げて御影と呼ばれた男を怒鳴りつけた。

「御影先生が遅刻なら僕も遅刻ですよね。」

御影の後ろからもう一人、真面目で気が弱そうな男が出てきた。

「佐野さん、分かってるならいちいち聞かないでくれる？」

婦長は今日機嫌が悪いのか：

私と同じ年代の人間が居ない。

私がそんなことを考えていると、何処からかカチカチとメールを打っている音が聞こえてきた。

「西河さん、今はメールをする時間ではありませんよ。」

西河と呼ばれた女は、看護師にしては、少し派手で、化粧も濃い。  
が、一方で、仕事が出来るというイメージも強い。

「それでは、これで朝のミーティングを終わります。」

婦長はそう言った後、御影と佐野、西河と私を呼び出した。

「御影先生と佐野さんは遅刻した罰、西河さんはメールをしていた  
罰として、神崎先生に病棟を案内して頂きます。」

「罰に使われるのも嫌なものだ」。

a c t 1 両者出揃う。(後書き)

拙い文章ですが、読んでくださり、ありがとうございます。

## a c t 2 試合開始!?(前書き)

つまらない話ですが、連載してます。

よければ、感想や意見アドバイスなどを書いて下さい。  
宜しくお願いします。

## act2 試合開始！？

「んで、ここが、仮眠室」

御影先生は、いかにも面倒くさそうに説明を始めた。

「で、次が、」

そう言った所で、御影先生は、話を止めた。

「でた、神引病院の名物、副院長」

「こんにちは。御影先生…と、こちらは？」副院長と呼ばれた男は、私の顔を見つめ、呟いた。

「この人は、今日からここで働くことになった神崎茉莉耶です」いきなり隣にいた、佐野が副院長に向かい、言い放った。

「そうですか…では、今度一緒に、お食事でもどうですか？」

— こういうタイプの男は嫌いだ—

「嫌です」

我ながら、いやな断り方だったと思う。

「面白い方ですね」

「よく言われます」

私がそう言い終えた後、院長の後ろにいた、堅物そうな男が急かす様に副院長に時間を伝えた。

「では、また会いましょう」

「結構です」

副院長は、柔らかな笑顔のまま去っていった

「小堺はどうも気に入わねえ」

御影先生が呟いた。

「御影先生も苦手ですか？」私は、少し驚いて聞いた。

「それより、その（御影先生）ってのやめてくれねえか？呼び捨てでいいよ」

御影か…悪くない。

私は今の御影の望み通り呼び捨てにすることにした。

「じゃあ、私はさくらで！」

「あつ、仲良くなった記念に今日は、みんなでどっかに飲みに行きませんか？」

佐野がみんなに提案した。

「いいね！！」さくらが大賛成した。きつとお酒が好きなのだろう。

「勿論、御影先生の奢りですよね！」

さくらが御影をのぞき込んだ。

「あんなに凄い家に住んでますしね」

「どんな家に住んでんの？」

私は、御影に詳しくそうな佐野に聞いてみた。

「御影先生のお家は、ヤクザの組長さんの家です」

「やっぱりね、顔からしてそうだもん」

私は率直な感想を述べた。

「そういう佐野はどんな家に住んでるの？」

「僕ですか？僕の家は普通ですよ？」

「神崎はどうなんだ」

「そうですよ」

さくらまで話に乗ってきた。

「私は普通だよ？」

そんな話をしているとさくらがいきなり大声をあげた。

「あつ今日から私たち2人患者さん受け持つんですよ！！」

「は！？さくら、それ先にいつてよ！！」

「婦長に挨拶に行っておけて言われてました」「208号室が川

田さんで、そのむかいの209号室が山岸さん。まずは、この二人の担当です」

「二人の症状は？」

「川田さんは胃の手術で入院の際に他の部分に腫瘍が見つかり、悪性か良性か調べるための検査入院で、山岸さんは、只の骨折なので心配ありません」

「そう」

私がさくらと歩いていく途中で、御影と佐野が何か話していた。

「俺、仕事が出来た女って好きだな」

「ですね。それで、私生活で、ちよっと弱かったりすると」

「そえられるよな」

「はい」

私たちは、そんなことを話されてるとも知らず病室に向かっていた

「川田さくん、こんにちは。」

「こんにちは。あなたが新しい先生？」

物わかりのよい患者さんで良かった。

「神崎、茉耶って言います」

「よろしくね」

優しい、落ち着いた声の持ち主だ。

「さくらちゃん？」

川田さんは、さくらを見つめた。

「ウメばあ？」

「知り合いですか？」

私は思わず川田さんに聞いた。

「さくらちゃんがまだ小さいときに家の隣に住んでたんだよ」

「川田さん、さくらと知り合いましたか」

「川田さんなんて呼ばなくていいよ、ウメばあにしてくれ」

「はい、ウメばあ」

「じゃ、また来るね」

私たちは、208号室をでて209号室に向かった。

「失礼します」

「山岸さんですか？」

「あんたらが先生？」

何だよこの、ムカつくガキ。

「ふん。顔は良いけど、年がな…」

「じゃまた来ます」

さくらはそう言って一人で出ていってしまった。

「え、もう行くの？」

私も早くこの場から離れたかったからさくらの後を追った。  
ナースステーションでは、何故か私たちの話をしていた。

「どうかしましたか？」

私は、内心焦りながらも平常心を装い聞いた「神崎先生と西河さん  
コンビになるそうよ」

近くにいた年輩の看護師に教えてくれた。コンビってなんだよ？  
私は、そのモヤモヤを消すためにその年輩の看護師に聞いた。

「うちの病院では、医療ミスを未然に防ぐ為、医師と看護師のコン  
ビを組ませて仕事をしてもらってるの」

「そうなんですか…」

「一番分かりやすいコンビは御影先生と佐野さんよ」  
だてに年をとってないわけだ。

「やっぱりね」

さくらが隣で呟いた。

「やっぱりって？」

私がそう聞くとさくらは

「何でもないです」

といって話を変えた。仕事帰りに私たちは、御影と佐野が着くのを  
待っていた。

「神崎先生」

「ん？」

「今、好きな人とかいます？」

「何よいきなり？そんな、学生みたいな話」

「いや、聞いてみただけです」

と、私もここでやめられては気になる。

「さくらは？」

「私はいますよ…」

「誰？」

「秘密…」

私たちは後ろに御影たちがたっているのも知らず、そんな話をしていた。

**a c t 2 試合開始!?(後書き)**

訳の分からん話になってしまいました。  
すいません。

**a c t 3 目には目を、 齒には齒を。 抜け駆けには抜け駆けを。 (前書き)**

あまり話が進んでなくてすみません。

読んで下さる心優しい方。

ありがとうございます

act3目には目を、齒には齒を。抜け駆けには抜け駆けを。

「お前ら、何の話してんだ？」

「御影先生、待ってもらってその口調は無いでしょう」

私たちの後ろにいた二人は不思議そうに覗き込んだ。

「御影さあ、立ち聞きなんて趣味悪くない？」

私は笑いながら怒る真似をした

「悪い悪い」

御影は話を軽く流した。

「絶対悪いって思っていないでしょ！」

私も負けじと言い返した。

「神崎先生も御影先生も後はお店でやって下さい」

「そうですよ。病院の前で騒いだら、迷惑です！」

「じゃ、早く飲みに行きませんか？」

さくらは心を弾ませて言った。

「で、佐野。どこ行くの？」

私は、計画者である佐野に聞いた。

「そうですね…落ち着いた店の方が良いですか？」

「あ、俺は個室の方が良い」

「今は御影先生には聞いていません、こっちの二人に聞いてるんです」

佐野は茶化す様に御影の話を流した。

「…決めました」

「佐野は自分の周りにある旨い店よく知ってるよな」

佐野は普段からそんなに店を多く知っているのだろうか？

「ここから近いんで歩きますね」

佐野は前を歩き始めた

私たちも置いて行かれないように追いかけた

「でも、御影先生も佐野さんも、私服のセンス良いですね」

「特に御影は意外」

私の考えていた御影の服は、もろそつち系の人を着る様な服だと思っていた。

しかし御影が着ていた服は、下が、黒のパンツを腰パンせずに履き、上は中が黒でその上に白のシャツをはおっている。

佐野は、下がターコイズのサルエルパンツに上は白のタンクトップの上に薄いピンクのシャツを着ていた。

二人ともなかなか、格好良い。

「いやでも二人とも白衣のときより良いよ」

何をもつて良いと言うのかは分からないが、御影は私たちを見て頷きながら言った

「ですよね。二人とも朝とはメイクの仕方が変わっているし」

「だよな、俺も思った朝とは顔つきが少し変わってるんだよ」

こいつらは、どこに気が付けば女が喜ぶが、すっかり分かつている。暫く歩いていると、隠れ家的な、薄暗い、お洒落な店が見えてきた。「ここです」

佐野は店の前で立ち止まった。

「良い感じなんじゃねえか？」

御影が佐野を軽く叩いた。

「亮って意外に興味良いよね」さくらの意外そうに、

「若くて仕事も出来て見掛けも良い看護師って大抵、趣味悪いんですけどね」

「なんだそれ、西河の経験上の話か？」

御影が眉をしかめた。「御影、妬いてんの？」

私は御影を試すように言った。

「ま、いいからまず、中に入りませんか？」

佐野がみんなを店に入れた。

店員に案内された席は、あまり大きくない個室でほんのり明るく、周りが全て木で出来てるため、独特の暖かみがあった。「まず、なんか腹にたまるもの食わねえ？」

御影と佐野は近くにあつたメニューを取り出し、隣にいた私たちに見せた。

「ここのおすすめは魚介類です」

「それじゃ、範囲広すぎて分かんない」

さくらはメニューに目を向けたままいった。

「いや、本当に全部いけますって」

「じゃあ俺は、アワビの塩焼」

御影らしい、渋いものを選んだな。

「さくらは？」

「私は、海老のチーズ焼き」

なんでみんな焼いたものなんだ？

「神崎先生は？」

「ん…じゃあ、サザエの柑橘添えかな？」

「お酒は今頼みます？」

佐野がドリンクメニューを皆に見せた。

「やっぱここは、ビールと焼酎で良いよなあ？」

佐野が店員に注文を伝え終わった後、会話の話題は、副院長になった。

「副院長って何であんなに偉そうにしてるの？年代的にはそんなに変わらないのに」

私は、ずっと気になってたことを話した。

「でも、この病院はいずれアイツの物になるんですし…」

さくらは意味深げな顔で言った

「どういう意味？」

「神崎先生、だって、小堺副院長のお父さん、院長ですし、祖父は元、医師会の会長ですよ？」

「ちなみに、今、結婚していなくて、早く、跡継ぎをつくれって父親に言われてるそうです」

佐野は平然と答えた。私は

「今時、そんな大奥みたいな話あるの!？」

そう答えた。

「とんだ將軍様だな」

御影は嫌そうに顔をしかめた。

「お待ちしました」

「ま、あんなヤツは忘れて、今は食べよう！」  
さくらが仕切り直した

「頂きます!!」

a c t 4 病院外での直接対決でリード！？（前書き）

またあんまり進んでませんね。

話がまとまらなくて。夏休みの宿題もあるし頭がいっぱいです。

## act 4 病院外での直接対決でリード！？

「美味しい」

口に入れた瞬間、柑橘系の風味と周りのソースが絡みあい、サザエの歯応えも心地良い。

それから暫くたち、みんなのお腹もある程度満たされた後、ついに、4人の体内に酒が回り始めた。

「お前ら、大丈夫か？」

酒に強い、御影先生が心配そうにさくらの顔を覗き込んだ。

僕は神崎先生の肩を揺すった。

「神崎先生、帰りますよ！」

「知らない」

神崎先生は机の上にあつた頭を動かし、僕を見つめた。

「なんです？」

僕は神崎先生に少し、冷静に対処した。つもりだ。

酔った神崎先生にドキっとしつつも。

「御影先生の家に連れて行って良いですか？」

僕は一先ずこの場から離れようとした。

何故なら、さつきから、後ろであの小堺副院長の声がしているからだ。

「なんでだよ！？二人を叩き起こして住所聞き出してカード渡してタクシーにぶちこんどけばいいだろ？」

僕は、まず店を出ようと御影先生に呼び掛けた。

「まあ」

しかし、出口からでるには、副院長の部屋の隣の廊下を通らなければいけない。

僕はおぼつかない足取りの神崎先生の腕を自分の肩に回し、歩き出した。

そのときだ。

「佐野君じゃないか？」

何、普通に気付いてんだよ！？」

「小堺副院長、何かご用ですか？」

御影先生が会計を済ませているうちに、終らせたい。

「私も、お手伝いしましょう」

小堺が神崎先生に手を伸ばした。

誰がてめえなんかに触らせるか！！

「大丈夫です。神崎先生、でかいところは、でかいですけど、細いところは細いんで。」

それ以外に用がないなら、失礼します」

僕は御影先生と共に、店の外に出た。

そこには、既に、御影先生の家物と思われる、黒のベンツが止まっていた。

「お待ちしておりました。高志さま」

「御影先生の名前、高志って言っんですか……」

僕たちを乗せて車が動き出した。

多分、御影家までいくのだろう。暫くすると、御影家に着いた。やはりいつみても大きい家だ。

acct5やっぱりね(前書き)

よくわからないことになってしまいました

## act5 やつぱりね

「まあ、入れよ」

「じゃあ、失礼します」

僕は神崎先生を、御影先生はさくらを抱えながら（なかば引きずっていたが）門をくぐった。

「お帰りなさいませ、若！！！」

……若？

そこには、今時、Vシネにも出てこないようなむさくるしい男たちが列を作り、声を張り上げていた。

「若！？」

その中にいた、一番偉そうな奴が俺やさくら、神崎先生を見つめ、驚いた。

「若！？こちらの方たちは…若のご友人でありますか！？」

…だんだん、軍隊のような、話しかたになってきたような…？

「ってか、その若ってやめないか！？俺もう若くないぞ！！」

御影先生が重い口を開いた。

「失礼しました、若！」

……だめじゃん。

そう言えば、さっきから後ろの方でヒソヒソと話し声が聞こえてくる。

「若が女をお持ち帰りされているぜ！？」

「やつぱあの人も看護師さんかな！？」

「うおっっ！！白衣萌えっっ！！」

……そこかよ！？

「てめえら！何話してんだ！？」

さっきの親分が出てきた。「すっすいません！！」

「てめえら、そんなに俺に殴りたいのか！？」

…俺たちはそこから逃げるように立ち去った

「それにしても、御影先生の部屋、大きいですね」

「35畳だから、そんなデカくねえよ」

……35畳!?

「この二人、起こした方が良いか？」

「ですね」

「おい、起きろ!!」

俺と御影先生は二人を起こした。

「……ここ……何処？」

「俺んち」

御影先生はあっさりと認めた。

「広くない？」

神崎先生は信じられない様な顔をした。

「神崎先生たち寝ちゃったんで一応、御影先生の家に来てきました」

目が覚めた時、隣に座っていた佐野は御影に同意を求めるように話した。

「ああ。お前ら酒弱いならあんなに飲むなよ」

さくらは嫌そうな顔を作り言った

「嫌なことがあったときは酒が進むんです」

「それにタダだし」

「神崎先生、それはタダっていうより奢りっていうんですよ」

さくらは面白そうに笑っている。

「副院長の話しのときに酒飲まないほうが変です」

そんな感じで私たちは、夜を過ごした。

朝。

小鳥の冴えずる音ともに、美しい朝日が4人の体を包みこんだ。

「……は？」

声が出た方に振り返ってみると

「……神崎先生？」

「……ここどこよ？」

佐野は寝癖だらけの頭で考え始めた。

「御影先生の家じゃないですか？」　「… 9 時 3 0 分… 遅刻にもほどがあるでしょ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7752a/>

---

Dr + ナース

2010年11月11日07時55分発行